

ヒトとモノの移動を活性化する インフラを整備したい

港や道路、鉄道などのインフラ整備に取り組みJICA社会基盤・平和構築部。小柳桂泉さんは、民間企業で長年インフラ整備を手掛けてきた経験を生かし、アフリカの港の整備に奔走している。

世界に誇る 日本のインフラ整備の技術

高校生の時、瀬戸大橋と青函トンネルという巨大インフラが完成し、地図に残る仕事に憧れるようになりました。大学では土木工学を専攻し、また、バックパッカーとして海外を旅していました。訪問国の一つのエジプトでは、日本企業が改修したスエズ運河を見学。日本が世界に誇る工事を目の当たりにして、海外のインフラ整備に興味を持ちました。

卒業後はゼネコンに就職し、日本国内の港湾工事の現場管理や設計などの業務に携わりました。残念ながら海外での仕事を担当する機会はなく、やはり挑戦してみたいという気持ちが強くなり、5年目にJICAに転職しました。

平和を呼び込む 橋を建設

JICAに入ってから3年目には、念願の海外のインフラ整備を手掛けることに。内戦が続くスリランカへ出張しました。北西部に浮かぶマナー島と本島を結ぶ橋の視察に向かったのですが、そこで待っていたのは衝撃的な光景でした。橋は内戦で爆破され、仮設の橋がかるうじて架かっている状態。バスが通ればぐらつき、いつ崩落してもおかしくない。マナー島の住民にとっては、

本島にある学校や病院、市場などへと通じる唯一の橋だけに、早急に対応が必要だと思いました。

視察の5カ月後には、新たな橋の建設に向けた本格調査を進めるため、コンサルタントと共にあらためて現地入りしました。しかし前回とは街の空気が一変していました。道路脇には銃を持った兵士が並び、上空には戦闘機が飛んでいました。内戦が激化していたのです。

ひとまず、調査団を引き上げることにしましたが、それでも何とか事業を始められないか模索しました。現地のJICA職員と密に連絡を取りながら治安状況を確認。1カ月後、情勢が落ち着いていたタイミングを見計らい、警備を強化して再度調査団を派遣しました。

半年の調査を経て建設が始まり、2010年について橋が完成しました。その前年に内戦が終結したため、橋は平和の象徴とされ、国を支えるインフラ整備に協力できたことにやりがいを感じました。

将来を見据えた 開発計画

現在は、主にアフリカの港湾整備を担当しています。その一つが、東アフリカ最大の国際貿易港であるケニア東部のモンバサ港。近年、貨物の取扱量が急増し、日本の協力で新コンテナターミナルの建設が進

んでいますが、今後も需要は増え続ける見込みです。どうターミナルを拡張し、将来の需要増に対応していくのか。ケニア政府は09年に開発計画を作成していますが、精度が不十分だったため「新しい開発計画を立てましょう」と打診しました。

しかし、ケニア側は「必要ない」と協議は決裂。一時はあきらめかけましたが、モンバサ港が今後きちんと機能していくためには必ず必要なものだと確信していたので、「将来の需要予測を精緻に行い、それを基に開発を進めた方が効果的」と粘り強く交渉。半年後、ようやくケニア側が納得してくれ、今、新たな開発計画作りが始まったところ

です。

港や道路、橋などが整備されれば、ヒトやモノの移動が活発になります。開発途上国の人々の生活を改善し、経済が活性化するようにインフラ整備に取り組んでいきたいと思っています。



パキスタンでは道路舗装技術の研究施設の建設予定地を視察した



JICA社会基盤・平和構築部
運輸交通・情報通信グループ
兼 計画・調整課

小柳 桂泉
KOYANAGI Yoshimoto

大学卒業後、ゼネコンに就職。退職後、2001年にJICAに就職。JICA沖縄、無償資金協力部(当時)、パキスタン事務所、JICA東京を経て、2013年4月から現職。



ケニアのモンバサ港で進む新ターミナルの建設現場を視察する小柳さん(左から2人目)